

# 「場」を問い直すための10冊

都市は、私たちの暮らしの基盤であり、  
産業・経済・生活文化といった営みのすべてが集約された「場」です。  
そのあり方を問い直し、  
魅力ある「場」をつくるうえで参考となる書籍を選びました。



## 6 『ポートランド』 ——世界で一番住みたい街をつくる』

全米で最も住みたい街に選ばれ移住者が増え続けるポートランドの施策を開発局勤務の著者が紹介。景観保全と産業・住宅開発のバランス、交通・水道・オープンスペースをひとつの環境システムと捉えたエリア開発、コミュニティを形成する市民や企業の都市計画への参加など、人口減少・産業縮小に悩む日本の市町村へのヒント満載の一冊。

山崎満広=著  
学芸出版社／2016年



## 7 『日本の風景・西欧の景観』 ——そして造景の時代』

フランスにおける日本学の第一人者にして著名な文化地理学者による風景の比較文化論。「山水」や「借景」のような自然と融合した東洋の視点が、自然と人間の二項対立を超えるべく模索されてきた西洋の空間と出会うとき、環境との豊かな調和が生み出されると説く。これからの都市や自然環境のあり方を考えるうえでも必読の書。

オギュスタン・ベルク=著 篠田勝英=訳  
講談社現代新書／1990年



## 8 『風土——人間学的考察』

アジアからヨーロッパに至る地域をモンスーン・砂漠・牧場と3類型し、民族・文化・社会の特質について考察する独自の比較文化論は、今も議論を呼ぶ力作。風土を単なる自然環境と捉えず、人間の精神構造のなかに刻みこまれた自己了解のしかたであるという基底から、外と内をわける「家」の捉え方や芸術論など豊かな発想力もおもしろい。

和辻哲郎=著  
岩波文庫／1979年



## 9 『パサーージュ論 第3巻』

ユダヤ人思想家ヴァルター・ベンヤミンがパリ亡命時に綴ったメモをまとめた近現代社会分析の古典。19世紀前半のパリに生まれたアーケード街「パサーージュ」を対象に人間の欲望やユートピア、時代精神を考察する。第3巻はその思想的-method論であり、近代と都市を読み解く概念である「遊歩者」の認識を綴った断章を収録。全5巻。

ヴァルター・ベンヤミン=著  
今村仁司、三島憲一ほか=訳  
岩波現代文庫／2003年



## 10 『東京の空間人類学』

近代都市を乱開発と非難するのは簡単だ。筆者は、江戸の古地図を辿る丹念なフィールドワークで、東京の深層に今もなお息づく江戸の都市空間の名残りをこまやかに拾い歩く。「その場所」がもつコンテクスト(文脈)を大事にし、計画・設計されていた都市構造を、建築史家が専門的視点で解説。都市学の定番書として今後の都市づくりのヒントに。

陣内秀信=著  
ちくま学芸文庫／1992年



## 1 『人間の街——公共空間のデザイン』

公共空間デザインの第一人者が、コペンハーゲンやニューヨークなど、世界各都市での実験を踏まえ、デザインの実践理論を体系化した一冊。都市開発がそこに暮らす人々を排除するものではなく、持続可能で健康的かつ安全な、いきいきとしたものであるためには、街に生きる人々の視線を尊重した人間的スケールこそが必要であると主張する。

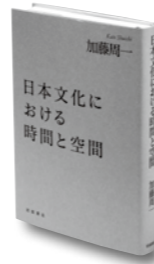
ヤン・ゲール=著 北原理雄=訳  
鹿島出版会／2014年



## 2 『日本文化における時間と空間』

戦後思想史の巨人が時間と空間を軸に日本文化の特質を論じる。絵画や建築、文学等を参照するなかで浮かび上がるのは、島国ゆえに内に向かい、全体を志向しなかった「ムラ共同体」に象徴される精神性だった。著者はそれを「今=ここ」の文化だとして、全体の構造化をせず循環する時間や空間、諸行無常の観念にその本質をみる。

加藤周一=著  
岩波書店／2007年



## 3 『船場大阪を語りつぐ』 ——明治大正昭和の大阪人、ことばと暮らし』

月刊『大阪人』の連載「大阪ことばを語りつぐ」より、船場を中心とした大阪の明治・大正・昭和初期の暮らしが語られた50篇を収録。商いと町の発展のために教育を重んじ、自らの暮らしを律し、ほがらかに平和を愛し暮らす人々の知恵が、大阪ことばでいきいきと語られる。大阪の「本来の姿」を知るための貴重な資料となる一冊。

前川佳子=構成・文 近江晴子=監修  
和泉書院／2016年



## 4 『複数性のエコロジー』 ——人間ならざるものの環境哲学』

無垢な自然環境を理想とする従来のエコロジーは、人間を環境破壊の元凶とみなし、結果的に人間不在の思想に帰着する。型破りなエコロジー論で注目される思想家ティモシー・モートンとの対話と著者自身の内省を通し、人としての新たな生き方を考える。自分への配慮とヒト・モノを含む他者との結びつきや共存を意識化することを説く。

篠原雅武=著  
以文社／2016年



## 5 『近世大坂の町と人』

産業・経済・文化が開花した近世大坂の姿を、町の主役町人に光をあて概観する。今も繁華街である道頓堀・千日前など盛り場の成立、大阪大学の前身懐徳堂と適塾の設立、海保青陵や木村兼葭堂といった思想家・文化人などの事象から、それらを生み出した大坂町人の気概と生活文化が浮かび上がる。今の大阪の成り立ちを知る絶好の書。

脇田修=著  
吉川弘文館／2015年

